

# アムールの風

正統右翼の論理

第11回 田中健之  
(黒龍會会長)

## 第二章

知られざる日本裏面史

大東亜戦争は果たして聖戦だったのか？

### 大東亜会議

欧米列強諸国によって併呑、植民地化されたアジア各地に同情し、心からその独立の支援と連帯を志したアジア主義と異なり、日本中心のアジア経済圏を確立すべく日本の官僚が構想したのが大東亜共栄圏でした。

大東亜共栄圏構想の中で、高く評価できることは、昭和十八(一九四三年)十一月五日に東京で開催された大東亜会議とその時に採択された大東亜共同宣言です。

占領下であったために参加していませんでした。大東亜会議によって採択された『大東亜共同宣言』は次の通りです。

抑々世界各國が各其ノ所ヲ得相倚リ相扶ケテ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ世界平和確立ノ根本要義ナリ。

然ルニ米英ハ自國ノ繁榮ノ爲ニハ他國家他民族ヲ抑壓シ特ニ大東亞ニ對シテハ飽クナキ侵略擄取ヲ行ヒ大東亞隸屬化ノ野望ヲ逞ウシ遂ニハ大東亞ノ安定ヲ根柢ヨリ覆サントセリ大東亞戰爭ノ原因茲ニ存ス。

大東亞各國ハ相提携シテ大東亞戰爭ヲ完遂シ大東亞ヲ米英ノ桎梏ヨリ解放シテ其ノ自存自衛ヲ全ウシ左ノ綱領ニ基キ大東亞ヲ建設シ以テ世界平和ノ確立ニ寄與センコトヲ期ス。

一、大東亞各國ハ協同シテ大東亞ノ安定ヲ確保シ道義ニ基ク共存共榮ノ秩序ヲ建設ス。

一、大東亞各國ハ相互ニ自主獨立ヲ尊重シ互助敦睦ノ實ヲ擧ゲ大東亞ノ親和ヲ確立ス。

一、大東亞各國ハ相互ニ其ノ傳統ヲ尊重シ各民族ノ創造性ヲ伸暢シ大東亞ノ文化ヲ昂揚ス。

大東亜会議には、日本の同盟国もしくは日本が旧宗主国を放逐した後に独立した各国が参加しました。参加国は次の通りです。

- 日本(東條英機首相)
- 中華民國(南京)国民政府(汪兆銘行政院長)
- 満州国(張景恵國務総理大臣)
- フィリピン共和国(ホセ・ラウレル大統領)
- ビルマ国(バー・モウ首相)
- タイ王国(ワンワイタヤーコーン親王首相代理)
- また、オブザーバーとして、自由インド仮政府首班のチャンドラ・ボースが参加しました。
- イギリスの植民地であったマライヤ、オランダの植民地であったインドネシアは、会議の開催当時は日本軍の

一、大東亞各國ハ互惠ノ下緊密ニ提携シ其ノ經濟發展ヲ圖リ大東亞ノ繁榮ヲ増進ス。

一、大東亞各國ハ萬邦トノ交誼ヲ篤ウシ人種的差別ヲ撤廢シ普ク文化ヲ交流シ進ンデ資源ヲ開放シ以テ世界ノ進運ニ貢獻ス。

この『大東亜共同宣言』は、東洋の碩学と謳われた大アジア主義者で維新者であった大川周明博士らが作成しています。

大東亜会議の開催と『大東亜共同宣言』がある限り、世界史における大東亜戦争は、断じて侵略戦争ではなく、「アジア解放のための戦争であった」と言うことができます。

### 昭和天皇は謀略を望まれたのか？

大東亜戦争は、果たして支那事変をどう総括するかが大きな問題です。

支那事変の原因を究明するには、清末から辛亥革命前後の日中関係を見て、分析する必要があります。

そもそも日本政府は、イギリスやアメリカ、そしてフ

ランスの内政干渉や外交的な圧力を恐れて、孫文に代表される中華革命運動に対して理解がありませんでした。日本政府は結局、孫文の亡命も認めることはなく、彼を国外に追い出しました。

日本政府が、辛亥革命の後に支持したのは、北洋軍閥でした。つまり袁世凱えんせいがいです。

日本政府は、袁世凱が皇帝になることを認める代わりに、対支二十一カ条たいし二十いちかじょうを突きつけます。

それに対して玄洋社や黒龍会の人々は、断固反対していました。

その理由は、「長城以北の満蒙は、中国ではないので、革命後は日本に委ねる」として、満洲問題について孫文が認めているため、その問題については、孫文が政権の座についてた際に彼と直接話し合いをすることで、平和裡に満洲問題を解決することが出来るからでした。

しかし、孫文を新政権から追いやった袁世凱と密約のような形で満洲問題の解決を図ろうとすれば、日中関係が近い将来、悪化するに決まっているというものです。

ところで、関東軍の謀略によって建国された、満洲帝国に対して頭山満は、「気がすすまない」といって、反対しています。

その根本的な原因は、優柔不断で常に後手に回る日本外交の愚かさに業を煮やした日本陸軍の危機感から来る苛立ちいらだちがありました。

国防の任を担になう軍部は、日本外交が後手に回った結果、中国大陸は完全に欧米列強に支配され、特に日露戦争の多大な犠牲によって、ロシアの満洲侵略を阻止した結果で得た、満蒙の特権利益を失い、ソ連や欧米によって満蒙が再び植民地化され、日本が日露戦争当時のような国防的な危機きに陥おちることを大変に恐れていました。

そのため参謀を中心とした日本陸軍は、実力を行使してでも満蒙を守ろうとしたのでした。

国防に責任を負う軍部の焦燥感しょうそうかんは一理あるとしても、果たしてそうした謀略的な行動が日本人の正義だと言い切れるのか否かを詳しく検討して、総括する必要がありません。

その総括で極めて重要になるのが、天皇陛下のお気持ちです。

「満洲某重大事件」即ち張作霖爆殺に対して、天皇陛下はすぐお怒りになられて、当時首相であった田中義一を呼ばれて、「お前の言うことは信用できない」と仰せられました。これによって、田中義一内閣は総辞職しまし

しかし、頭山や内田に代表される玄洋社や黒龍会の人々は、満洲帝国建国以前にパプチャップに代表される人々が行った満蒙独立運動に対しては、絶大に支援していません。

彼らは、大アジア主義の理念に基づき、満蒙の民族が自主的に行った民族独立運動をサポートします。

それに対して当時の日本政府は、そうした現地の民族独立運動に関係なく、謀略によって国を建国するとか、インフラを建設するとかいうことを強引に行いました。

それは大アジア主義の理念と真逆なものでした。民族独立などの主張は、一見、大アジア主義も日本の国策も同じことを言っているようですが、それはまったく違うことをやっているのです。

日本政府は、孫文に代表される中華革命を潰して、それとは反対の北洋軍閥を支持しました。

袁世凱の没後に軍閥が跋扈はつごして、戦国時代さながらとなった中華民国の主人にと、日本が据すえたのは、元々反日的だった馬賊出身の張作霖ちやくりんでした。

日本の軍部は、彼を引っ張り出しておきながら「張作霖は、日本の言うことを聞かないから殺してしまえ」と言って、彼を爆殺してしまいました。

た。

国の中枢にいる人間は、いつの時代でも常に、特別に天皇陛下のお気持ちを考えなければいけません。昭和天皇は、張作霖爆殺や関東軍の手による満洲建国を果たした謀略を望んでおられたのか？ 私は断じてそれは無いと思います。

そうした日中関係の中で生じた支那事変、そしてその延長線上に勃発はつぱつしたのが、大東亜戦争でした。

そうしたことから、「大東亜戦争は果たして聖戦だったのか？」と問い詰められた時に、「聖戦だった」と、堂々と胸を張って言えるものではなかった、ということになります。

大東亜戦争を総括した時、「大東亜戦争は、明治維新以来の欧米に追従した日本外交によって日本に国防的な危機を齎もたらし、それによって軍部の危機感から来る焦燥が根本的な原因となって勃発した戦争だった」と私は考えられています。

つまり、今日、東京裁判史観に基づく大東亜戦争を侵略戦争だと決めつけた「日本自虐史観」や、すべて日本の行動が正義であったとする「大東亜戦争聖戦史観」の両極端の二つの大東亜戦争の史観が二分されていること

自体こそが、大東亜戦争の本質を見誤るものです。

明治維新以降の日本は、薩長藩閥政府による支配体制の中、常に欧米追従外交を展開し続けた結果、中国大陸を巡って欧米列強諸国と利権が対立したことを発端として、遂に日本が戦争へと追い詰められた挙句が、大東亜戦争だったと私は考えています。

西郷隆盛を死に追いやり、日韓合邦を併合にすり替えた日本政府のアジアに対する傲慢さは、逆に欧米列強諸国に対する卑屈さの現れでした。その卑屈さと傲慢さが入り混じって支那事変となり、大東亜戦争への道を日本が歩まざるを得なくなったのです。

つまり明治維新以降、第二維新が尽く弾圧され潰されたことから、薩長藩閥政府という新たな幕府的勢力が日本を支配し続けた結果が大東亜戦争へと日本を追い込んで行ったという事実を我々は考える必要があります。

そう考えた時に、西郷隆盛に代表され、戦前では、昭和維新運動という第二維新運動こそ、日本の救国運動であり、私は「日本自虐史観」や「日本聖戦史観」という対立する両極端な史観こそ、日本の将来を誤るものだと強く実感しています。

それよりも第二維新の立場に立った、「維新史観」とい

う新たな歴史観、大東亜戦争史観の確立こそ、日本の将来と救国のために急務だと考えております。

### ——ベストセラー本

### 『大義』に記された陸軍の姿——

支那事変で壮烈な戦死を遂げて、軍神と讃えられた杉本五郎中佐の遺稿集が、『大義』と題して、平凡社から出版されました。昭和十三（一九三八）年五月のことです。

同書は、終戦に至るまでに二十九版を重ね、一三〇万部を超える大ベストセラーとなりました。

『大義』は、伏せ字箇所も多く、それはすべて皇軍を批判する箇所でした。その伏せ字箇所は、杉本中佐を極めて尊敬する人々の手によって密かに復元されており、その復元された伏字箇所を次に紹介します。

杉本中佐は、当時の日本陸軍について、

「大義明白なる戦争発起も、之に従ふ上下、大義不明ならば、各々自己を執ってその保存に懸命の努力を終始せん。

上は其の功を競ひて他の損傷を顧みず、下は自己保存の極限を発揮して上を怨嗟す。一度敵地を占領すれば敵

国民族なる所以を以て殺傷して飽く事なし、掠奪して留る処を知らず。悲しむべし、万端悉く皇軍の面目更に無し」(杉本五郎中佐遺稿『大義』私家版、杉田幸三編集・発行、昭和四一年。七一頁)

と、述べています。

「皇軍は、神将、神兵ならざるべからず。此の精神だに徹骨徹髓透徹しあらば、忌むべき、皇軍汚辱の自己功名保存の利己的戦争とはならざるなり」と断言しています。

そして戦場における皇軍の様子について、

「二会戦終る毎に、上下の秩は愈々乱れ下は増長慢となり、自己所屬の将にあらざるば、全く無差別下克上となり上之を指導するの明識を欠き、功名に酔ひて一時を糊塗して、皇軍崩壊の遠因素因を為し、皇国の安危慮外に在るものの如し。皇軍緒戦に於いて既に然り」(『前掲書』、七三頁)

と記しているのです。さらに杉本中佐は、

「世界興亡の足跡を仔細に検討せよ。其の滅亡の最大原因は常に飽くなき利己心、停止を知らざる自己保存ならずや。斯くして今次の戦争は帝国主義戦争にして、亡国の緒戦と人謂はんに、何人是に抗弁しうるものぞ。国

の頹廢に導くものは共產輩に非ず、人民戦線に非ず、乃至社会主義にも非ず。此等の主義は日本精神練磨の大砥石鳴り、為に皇精神は愈々光を放つ。亡国は底なき自己保存、飽くなき利己心にあるのみ」(『前掲書』、七三―七四頁)

と喝破しています。

世界の興亡の原因を強い自己保存と飽くなき利己心としているのが興味深いところです。

最後に中佐は日本軍に対してこう忠告しています。

「軍よ、挙軍功名心を去れ、自己保存の汚体より脱却せよ。戦いは先づ心に向って開始せよ。一身の維新を計りて、真の日本軍人に蘇生せよ。かくして、始めて軍は、皇軍、将は神将兵は神兵、戦いは聖戦なり」

これら言葉は、軍神と讃えられた、杉本中佐の遺言です。

杉本五郎中佐は、詔勅がない、大義が明白でない支那事変についての現状を述べ、その憂国至情を吐露しているのです。

### ——国を憂うる維新者、児玉誉士夫の手記——

戦後、右翼のフィクサーとして世間から畏怖された児玉誉士夫は、戦争中は児玉機関を組織して、戦火の中国大陸で活躍していました。

この時に彼は、日本軍の乱暴なことを目撃して、やはり支那事変を批判しています。児玉は、

「この眸、この聴覚によつてとらえた日本軍の実体は……まさに百鬼昼行、奇々怪々であった。(中略)時すでに、日本軍としての真面目、そして厳正なるべき軍規はうしなわれ、あるものはただ泡沫のような痴者の勝利感だった。

わたしはあまりの極端さと醜悪さに、じぶんの眼を、耳をうたがい、『これが生死を賭けての、日本民族の興廢浮沈を決定する聖戦か』と、あきれもし失望しないではいられなかった(児玉誉士夫『悪政・銃声・乱世』弘文堂、昭和三十六年、一六二頁)

と手記に記しています。

また、『われ敗れたり』の中で児玉は、

「当時、大同では、大同に処女なし、という不名誉な言葉があったが、この言葉は、とりもなおさず日本軍の恥辱を意味するものであった。また、占領地の寺や廟に行つてみても、中国人が朝ばん敬信し三拝する仏像の首

などは無残にもふつ飛ばされ、その壁には、何年何月、何部隊占領、などらしく書きされ、金釘流とともに皇軍の恥をかき残していた。

人間が神や聖人でないかぎり、どこの国の軍隊でも戦場にあつては若干のまちがいはあるとしても、当時、日ましに激化する中国の抗日思想の源は、ただ、満洲事変のみにその原因をきすることはできない。このような現地にある日本軍の常識はずれの行為こそ、一そう、それに拍車をかける結果になつたと思う(児玉誉士夫『われ敗れたり』協友社、昭和二十四年、一〇〇～一〇一頁)

と記し、

「宣戦の詔勅なき戦争、名分の明らかならざる戦い、日華事変は、畢竟、王師でなく驕兵であつたかも知れない、自分は大陸の戦場に旅し、いく多の悲惨なる実状を知り、在華百万の日本軍が、聖戦の師なるか、侵略の驕兵なるか、の疑問に悩まされたのである。この疑問は自分のみではなく、恐らく多くの人々が考えさせられた問題と思う(『前掲書』二〇一～二〇二頁)

と、児玉誉士夫は、杉本中佐と同様のことを述べています。さらに彼は、

「ある日、自分は中国の映画館に入つてみた。さい初、昭和四四(一九六九)年十二月六日、東京のホテルオークラの平安の間において児玉誉士夫は、岸信介元首相をはじめ、政財、文化、マスコミなど、日本を代表する錚々たる著名人、約一千人を招待し、日本の近代史を謳い上げた抒情詩『民族の歌』の発表会を開きました。作詞者である児玉誉士夫は、その九、十番の歌詞の中で、支那事変を次のように謳っています。

九、広袤千里大陸に 砲火にまみえしその敵は

同じアジアの友にして 永遠にぞ悔い残したり

十、銃火で越えし万里城 弾雨で渡る大黄河

されど果てなき戦いに アジアの危機は迫りたり

(児玉誉士夫作詞、古賀政男作曲、『民族の歌』)

「日華事変は世界の大勢と、近代の中国を認識していなかった日本の絶対的失敗であった。しかし、その失敗の中から少数の日本人ははじめて底知れぬ中国の力を知り、また現実の中国を認識したのであるが、ようやくそれに気づき知ったときはおそく、中国における一さいの勢力とその基礎は崩壊し大陸から追放される日が迫っていた(『前掲書』二一八頁)

そして児玉は次のように結論しています。

「日本人の手になるあらゆるものが亡びざる日がくるであろう。それは覇者と思いがつたものの末路であり運命である(『前掲書』二一八頁)



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家。昭和38年11月5日生まれ。福岡市出身。玄洋社初代社長岸田浩太郎の曾孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈を継承する経歴。拓殖大学日本文化研究所近代史研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及びモスクワ市立教育大学外国語学部客員研究員、日露善隣協会会長。2008年に黒龍会を再興し会長に就任。主な著書に『満洲に祀られる人々』、『昭和維新』、『北朝鮮の終焉』、『実は日本人が大好きなロシア人』、『横浜中華街』など。中央公論『正論』、『歴史群像』などの論議誌に多数執筆。